

化学教育 徒然草

手間を惜しまず

HYODO Yuki

兵藤 友紀

芝中学校・芝高等学校 教諭,
日本化学会化教誌編集委員会 副委員長,
日本化学会化学だいすきクラブ小委員会 委員,
日本化学会大学入試問題検討小委員会 委員,
日本化学会化学グランプリ小委員会 委員



5年以上前に本校のほぼすべての教室の黒板がホワイトボードに変わった。カンカンと音を立てながら板書をしたり、指がチョークの粉まみれになったりした頃が懐かしい。化学の授業では実験装置の図をよく書くが、チョークだと線の太さを変えられたり、濃淡をつけられたりするので好きだった。ホワイトボードマーカーでは線を太くしたり塗りつぶしたりするにも限界があり、斜線でごまかすのがせいぜいである。一方で便利になったこととしては、ホワイトボードに変わったのに合わせてプロジェクターや音響機器が備わり、スクリーンを下ろすことなくホワイトボードにスライドなどを直接投影できることである。便利な時代になったと感じる。

以前、数学の授業を見学したことがある。そのような教室環境であるからだろうが、解法過程を記したスライドを投影して、PCのEnterキーを押下していくスタイルの授業であった。スライドのページがすぐに切り替わってしまうため、生徒は教材に途中式を書き写すのに必死である。もちろん説明は口頭できちんとしていたし、準備には相当の時間を割いたと思う。最近では教科書出版社が授業用スライドを付属するケースが増え、それとPCさえあれば授業ができてしまうようになってきた。このような授業スタイルに違和感を覚えるのは私だけだろうか。例えば、高校3年生の有機化学の私の教材には構造式が一切書いていない。もちろんわざとそうしている。自分の手で書かないと意味がないと考えているからである。であるならば、私も同じようにするべきであると考え、構造式だけでなく、反応経路図や化学反応式もすべてホワイトボードに書くようにしている。授業の時間は2倍も3倍もかかってしまうかもしれないが、学問を学ぶのに近道はない。

最近の生徒は、完成された教材や反応経路図など、言えば何でももらえると思っている。便利な時代を生活しているから、そこは仕方がない。しかし、どんなに便利な時代になっても、教師は学問を学ぶのに近道はないことを教え、手間を惜しまず、生徒と一緒に同じことをやるのが大切なのではないかと考えている。

[連絡先]

105-0011 東京都港区芝公園 3-5-37 (勤務先)